

目を閉じて、心で感じる

横浜YMCA学院専門学校 チャン・ティ・ジオ・リン（ベトナム）

人を外見で判断していたかもしれない。

それまでは、人に初めて会う時、相手がどんな人かまだよく分からなければ、だらしなく汚れた服装をしている人を見ると、ちよつと怖くて良い印象を持つことができなかった。

しかし、運命のような、ある偶然の出会いによって私のこの考え方が変わった。

去年の12月31日。1年で1番大切な日を迎えるため、色々な準備をするつもりだった。毎日通い慣れた川沿いの道で、急いで自転車に乗って走り出したとたん、突然どこからかリヤカーが出てきた。慌てて急ブレーキをかけたのだが、すでに遅かった。道に空き缶や新聞紙などが、ばらばらに散らばった。

「あら、すみません。迷惑かけちゃった。」

と目の前のおばさんが言った。私のせいなのに、謝られてしまった。

「いいえ、私のせいで本当にすみません。」

散らばったものを拾いながら、少し話しているうちに、私はその人が路上生活者だと気づいた。動揺して、とっさにかばんの中にあつたパンと千円を渡した。しかし、これも断られてしまった。

「私は路上生活者だけど、自分で暮らしていけるんだよ。お金は絶対もらわない。ありがとうね。あけましておめでとう。」

大きな目で私を見て、またリヤカーを押して歩いて行った。思いがけず、新年おめでとうの言葉をもらった。寒い風が吹いていて、その姿は、次第に暗くて寒い街に消えていった。おばさんの話方や、思いがけない行動に、私の頭は凍ったかのように働かなくなった。

その目から強い意志がうかがえるおばさんに出会って以来、私は日本の路上生活者について考えるようになった。日本に来る前、私はみんなと同じ考えを持っていた。日本は豊かな国で先進国だから、路上生活者なんていないのは当然だと。しかし実際暮らしてみると、そんなことはなかった。物事は時には2つの面を持つ。ここには駅、公園や河川で暮らしている人もいる。その理由は失業問題だと思っていたが、この事件があつてから調べてみると、日本の路上生活者の中には、自分で自由な暮らしを選んで路上生活をしている人もいるらしいのだ。

また自尊心についても考えるようになった。路上生活者がみな、いつでも人からお金をもらいたいと思っているわけではないように思えた。ほかの国に旅行した時、お金をもらうために都市に出てくる路上生活者がいると、バスガイドさんに聞いたこともある。

だから私が出会ったおばさんを見たとき、とっさにお金を渡してしまったのだが、おばさんの行動のおかげで、今まで私知っていたことが変わってきたような気がした。自尊心を持ったおばさんの姿に、はつとさせられた。もし自分だったら、と考えてみた。自尊心を守るとは易しいことではないということ確かだ。

私達の存在は世界にひとつだけであるから、一人一人が違う性格や個性を持っているのは当たり前だ。だが、礼式とマナーが非常に重要視されている日本では、例えば卒業式や仕事の面接の時、一般的な服装はスーツだ。スーツを着ない人は変な人とか、きつちりしていないと考えられたりする。また、人と人の挨拶も決まっていることが多い。仕事が終わった時に「お疲れ様です」と言わなければ

ばならない。そのような社会では、人の個性はなかなか出せないし、プレッシャーを感じることもある。個性というのはいつも内部にひっそりとあるものだ。

では、外見からだけだと、やはりその人のことは何もわからないのだろうか。

人は実際に他人の立場に立つことはできない。また、接して想像する以外に他人の感情を目で見ることができない。私は他人の心がどんなものであるかは時間をかけて感じてくるものであると考えるようになった。

人間の幸せは、決まった肩書、役職、また権力や財産などの外見からは決められなく、幸せかどうかは、その人が周りの人からどう尊重されているかによるものだろう。従って、その幸せのためには外見で人を判断せず、寛容な態度で接するべきだと考えた。そうすれば、つまらない誤解がなくなり、人間関係がよくなっていくのだと信じた。

「人は外見で簡単に判断できるものではない」という教訓を、もう一度心の深いところで確認することができた。本や学説などで勉強したことより、もつともつと心の深いところで受け止められた。それは、おばさんからもらった新年のプレゼントだと思った。

